

同胞の音  
信に接すカシミヤ  
商人の西  
藏談

御一報あれ、予は貴官とスリナガルに相見んとす云々。  
因て直ちに打電し、到着及スリナガル着の豫定を報知す。北京出發以來、我國人の音信に接せし事前後三回、其一は哈密にて在北京公使館附青木大佐より、其の二は喀什噶爾にて京都西本願寺大谷伯爵より、其三は即ち今回とす。萬里遠征の客異邦に在りて同胞の音信に接す。其愉快なること譬ふるに物なし。

此地は又西藏、拉薩府に到る分岐點に當れり。當時拉薩に住居する一カシミヤ商人の滞在せる者に就て、其の狀況を聞きしに、此地は拉薩府を距る約三箇月の行程に在りて、是より東二十日行程の處に、ガルドックと稱する一部落あるのみ。沿途水草、薪に乏しからず、小嶺數多前途を遮るも、大且つ險なるは無く、小河數條の路上を横切るも、深且つ急なるは無く、騎行徒涉共に容易なり。旅行期は九月末以來十月初旬を最も良とす。ガルドックを過ぐれば、唯清人が黒々子ヘイヘイズと稱する「ギルギス」人の氈幕處々に散在せり。該族は游牧人にして、每家羊を看守せしむる爲め、二三頭の大なる犬を畜ふ。其性頗る獍猛、爲めに彼の氈幕に近づかんと欲するときは、十分の注意を要す。